

つなぐ62

2022年春号
令和4年3月発行
第16巻第4号
(通巻62号)

地域医療を考えるペガサス情報誌



Special

コロナ禍であつても、
地域の医療を守り抜く。



新型コロナウイルスの 感染を広げず、 地域医療を守る。 ペガサスの2年間の闘い。

この2年間、日本はもちろん、

世界中が新型コロナウイルス感染症に翻弄されてきた。

中国武漢市で最初に確認されたウイルスは変異を繰り返し、

そのたびに私たちは懸命な対応に追われてきた。そして、それは現在も続いており、

感染拡大の収束まで

今しばらく時間がかかると考えられている。

馬場記念病院では、未知のウイルスの脅威に立ち向かい、着実にノウハウを積み重ね、

ペガサスグループ全体で感染予防を実践してきた。この間、ペガサスが一貫してめざしてきたことは、たとえコロナ禍であっても、

地域の医療を可能な限り守り抜くことだ。

新型コロナウイルスから

患者さまや職員を守ることをモットーに

感染予防を徹底するとともに、

使命感と勇気を持つて、必要とされる救急医療や

急性期医療の提供に全力を注いできた。

今回のつばさは、コロナ禍の2年間を振り返り、

とくに最初の混乱期にスポットをあて、

職員たちの奮闘を追った。



ペガサスケアプランセンター
統括管理者
河内 良祐



職員サポートセンター
センター長
長谷川 裕之



ペガサスリハビリテーション病院
看護部部長
紀ノ岡 真弓



馬場記念病院
呼吸器科部長
高村 龍一郎



馬場記念病院
副院長
西尾 俊嗣



それは令和2年1月から始まつた。

中国で初めて確認された新型コロナウイルス感染症は、たちまち世界中へ広がつていった。その初動期から馬場記念病院がどのような対応を行つてきたか振り返る。

令和2年1月、初めての緊急会議が開催された。

湖北省武漢市で初めて確認されたのは、令和元年12月のこと。

そして、国内では令和2年1月16日、初めての感染者が確認された。そのニュースを知った馬場記念病院・感染管理認定看護師の森田恵美は「これはあつという間に、全国へ広がつていくのではないか」という強い危機感を感じた。数日後、馬場

武彦理事長をはじめ、各診療科・各部門の代表、ICT（インフェクション・コントロール・チーム・感染対策チーム）のメンバーなどが集まり、初めて感染症対策を討議する緊急会議が開かれた。

森田はICTの一員として、

緊張した面持ちで会議に臨んだ。最初に、議題に上つたのは、春節（令和2年は1月25日）の休暇で母国に帰つていた中国人スタッフを、どのように迎えるか。もちろん、この時点では厚生労働省から明確なガイドラインは示されていない。さまざま

まな角度から慎重に検討を重ねた結果、念には念を入れ、しばらく自宅で待機してから現場の仕事に復帰してもらうことになった。「正解がないなかでの判断は難しかつたですね。教科書で学んだパンデミック（世界的な流行）が、まさか自分の現役時代に起つことは思いませんでした」と、森田は振り返る。



平時から毎朝開催されているRM／ICTカンファレンスでは、西尾副院長、看護部部長、感染管理認定看護師等が新型コロナウイルス対策について話し合っている。

毎朝、開催される RM／ICT カンファレンス。

馬場記念病院では、平時から毎朝、RM（リスクマネジメント）カンファレンスを開催している。

主なメンバーは、副院長である西尾俊嗣医師を筆頭に、看護部部長、感染管理認定看護師、臨床検査技師、薬剤師など。新型コロナウイルスへの対応が始まった1月以降も、同じように毎朝カンファレンスを開いて、状況確認や方針の決定を行つてきた。

メンバーが最も頭を悩ませたのは、感染者への濃厚接触が疑われる職員への対応だった。環境感染学会のガイドラインを参考にしながら、かなり厳しく就業制限をかけることとした。森田はそうした感染対策の最前線に立ち、日々、職員からの質問に対応していた。「濃厚接触の職員が出るたびに、この対応でいいのか不安になり、悩んでいた時期もありました。たとえ感染者に接触しても、眼の防護とマスクをしっかりと、短時間の接触であれば、濃厚接触者に該当しません。そういう基準をもつと早く周知できればよかったです」という想いもあります。西尾先生から道筋を示していただき、乗り越えることができました」（森田）。



**厚労省の指針よりも
早く、厳しく。**

職員の行動指針では、最初か

ら職員の海外への渡航を全面禁止にするよう求めた。その必要性を強く主張したのは、呼吸器科部長の高村竜一郎医師である。実は高村は前職の病院で感染対策のリーダーを担つた経験を持つていた。ちょうどアジアや力ナダを中心に、SARS（重症急性呼吸器症候群）が流行してい「幸い実行することはありますた平成14～15年のことである。

病院の入り口に、 最初の防波堤をつくる

この急ごしらえの発熱外来は、最初、医師は高村一人で対応した。「まだ新型コロナウイルスの知識が行き渡らないなか、門の医療機関に搬送する体制を整えることになった。

感染防止のための行動指針を作る。ICTが事務職の協力を得て、早くから取り組んだ活動の法などを細かく決めていった。行動指針は状況に応じて内容を見直し、約2年経った今は改定33版まで進んでいる。「この2年間、幸い、クラスターを出したことなく、乗り切ることができ

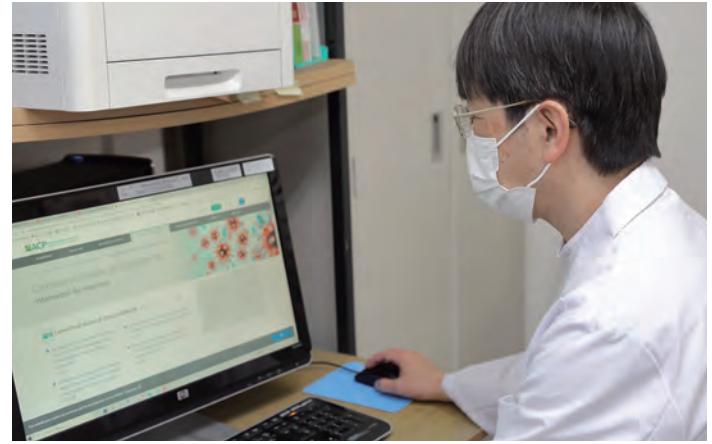
ことなく、乗り切ることができたのも、職員の皆さんのが本当に真摯に行動指針を守ってくれたおかげだと感謝しています」（森田）。

万が一、職員が感染するようなことがあつては元も子もありません。最初は知識のある診療科の長がリスクを負うのが妥当だと考え、一人で行いました。もちろん恐怖心もありましたが、逃げていては何も解決しません。海外の論文で得た知識、そして、自分の目の前で起こっていることを謙虚に観察しながら守りを十二分に固めつつ、職員のみんなにスキルと空からでも勇気を示して、みんなが一步二歩対処していくようにしようと考えました」。

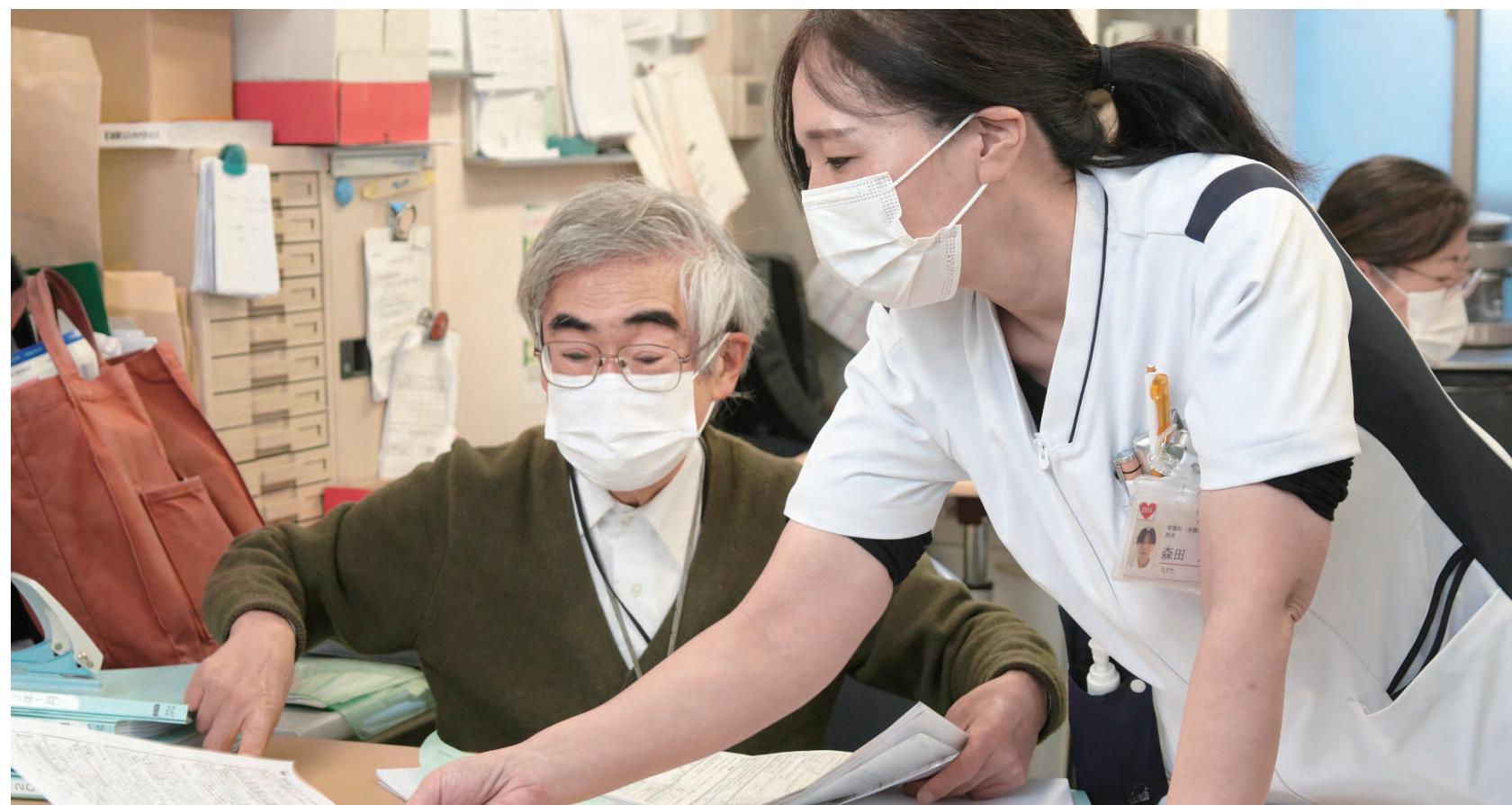
らその他の診療科へ、協力の輪が広がつていきました。また、その前から診療放射線技師が防護服を着て、嫌がらずCTを撮つてくれました。これも非常にありがたかったです。今では、内科全科医師、外科医師までもが平然と治療も行います。職種を問わらず素晴らしいスタッフだと心から思います」と、高村は顔をほころばせる。

当時、医療機関のなかには、感染リスクを考慮し、一時的に発熱者のCTを撮らない方針のところもあつた。しかし、PCR

発熱患者さまを隔離して検査する体制は、しばらくの間、高村医師一人体制で続けられた。しかし、日増しに発熱患者さまの数は増えていく。そこには、一番に加勢をと宣言したのは、外科の面々だった。5月の連休前、「明日から僕たちもPCR検査しますよ」と申し出た。その一言で、体制は一気に広がった。「副院长である外科の寺岡均部長が声をかけてくださったのが、すごくうれしかったですね。非常に感謝しています。外科か



インターネットで欧米の医学誌に掲載される論文を調べ、最新の情報を収集し感染対策に活かしている。



新型コロナウイルス感染対策の管制塔を担う西尾副院長と森田感染管理認定看護師。日常的に話し合い、情報共有に努めている。



呼吸器科部長の高村医師一人で始めた発熱外来。
現在では多くの診療科の医師が対応している。

「院内クラスター」を出さず、地域医療を守り続けられるのは、行動指針を遵守してくれる職員のおかげ」と西尾副院長。

**新型コロナウイルス陽性の可能性もある
救急患者さまを受け入れるために
院内感染を防止するための動線などを工夫した。**



新型コロナウイルス抗原検査機で検査する臨床検査技師(左)。

コロナ禍であっても感染対策を実施した上で、救急患者さまを受け入れている(右)。



当初では、CT画像が診断に大きく寄与した。馬場記念病院では職員一同の総力戦で、診療とクラスター防止策が一体となつた新型コロナウイルスとの闘いが続けられた。

新型コロナウイルスの 感染が拡大しても 守るべき医療がある。

令和2年1月頃、感染予防体制が整わないと、馬場記念病院では苦渋の選択として、一時的に発熱のある救急搬送患者さまの受け入れを断つていた。万一千人でクラスターが発生すれば、たちまち外来を制限しなくてはならなくなる。入院患者さまを守り、通常の医療を続けるための苦渋の選択だった。

しかし、その方針は1カ月ほどで転換されることになる。副院长であり、ICTのリーダーを担当する西尾俊嗣医師は次のように話す。「院内でのクラスター発生はもちろん絶対に防がなくてはなりません。しかし同時に、地域医療を守る病院として、発熱があるうがなからうが、医療を必要とする患者さまを受け入れなくてはならないと考えました。とくに、当院が得意とした。とにかく、当院が得意とする脳神経外科分野の疾病は命

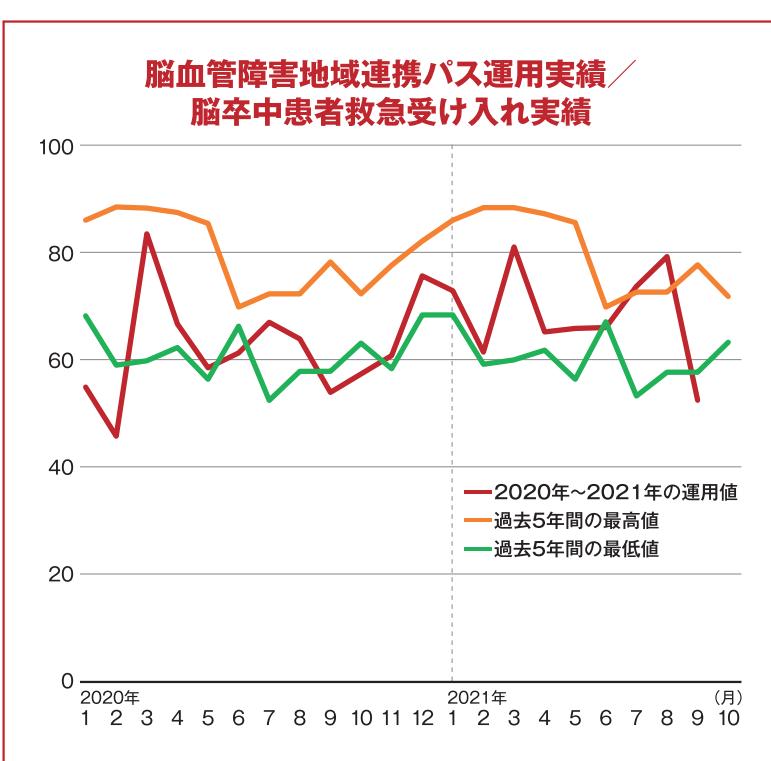
りしない」という、馬場記念病院の通常の医療を守るために、病棟の職員も懸命に対応した。当時、馬場記念病院 看護部副部長を務めていた紀ノ岡真弓(現・ペガサスリハビリテーション看護部部長)は次のように証言する。「発熱のある救急患者さまは、まだ新型コロナウイルスの陽性か陰性かがわからぬ状態です。ご本人も私たちも不安を抱えながら、それぞれの個室に入院していただきました。患者さまに接する際はもち

ろん、マスクやガウンなどの防護ぐをしっかりと着用しましたし、最初の頃は消毒もやりすぎたほどやりましたね」。

個室を空けるために苦労したのが、ベッドコントロールだ。「毎朝、各病棟の看護師長のミーティングで、ベッドの空きを確認し合うのですが、診療科の垣根を超えて、みんなが個室を譲り合ふ雰囲気ができました。改めてスタッフの絆を感じることもできました」と紀ノ岡は話す。

「救急患者さまを決してお断りしない体制を堅持。 入院患者さまを断らない体制を堅持。」

※脳血管障害地域連携バスは、脳卒中の患者さまに対し、地域の病院や診療所などが連携協力しながら治療するための「診療計画」を作成し、馬場記念病院がどの程度、脳卒中の救急患者さまを受け入れているか推定できる。



最も大変だったのは 第4波の時期。



新型コロナウイルス抗原定量検査機での検査により院内で新型コロナウイルス感染の有無が早期に判断可能になった。

大きな力となつた 抗原定量検査の導入。

救急患者さまの受け入れ体制がよりスマートになつたのは、9月に入つてからのこと。新型コロナウイルス抗原定量検査機（ルミパルス®※）の導入が分岐点となつた。抗原定量検査とは、ウイルスに感染した細胞が特異的に産生する抗原を検知して診断に導く検査。PCR検査とほぼ同等の精度があり、1時間以内で検査結果がわかる。

「院内で新型コロナウイルス感染の有無が即座に判断できるようになり、救急患者さまを安心して受け入れられるようになり

ました。病棟看護師の不安が減り、ストレスも緩和されました。本当に画期的な出来事でした」（紀ノ岡）。後日、この抗原定量検査は、手術や内視鏡を受ける患者さまにも行うなど、検査の対象を拡大。濃厚接触が疑われる職員の検査にも使われ、「新型コロナウイルスを持ち込ませない、広げない」ために大活躍している。但し、抗原定量検査は万能ではなく、限界もある。西尾医師は「検査で陰性であつても、決して油断してはいけない」ということを院内研修で何度も話し、職員たちの正しい理解を促した。

※「ルミパルス®」は、厚生労働省が認可した、高精度の新型コロナウイルス抗原定量検査機。製造販売業者は、富士レビオ株式会社

この2年間を振り返り、最も大変な時期はいつだつただろう。「知らないことばかりで怖かった初動期は当然大変でしたが、それ以外で言えば第4波、令和3年3月末から5月にかけて、とくに悪戦苦闘しました。といふのも、この時期に感染した人の多くが高齢者、重症者だったからです。大阪府ではどの医療機関も非常に苦労したと思いまますが、私たちも医療のキャパシティを超えていると感じました」と、西尾医師は話す。

たとえば「こんなことがあります」と下腹部痛で、介護施設から高齢患者さまが救急搬送されてきた。救急外来の医師や看護師たちが懸命に対応したところ、S状結腸軸捻轉（S状結腸がねじれて、腸が詰まつたり動かなくなつた状態）と診断し、緊急入院となつた。その後患者さまが入所していいた施設でクラスターが起きていたことが知らされた。幸い、患者さまは陰性で、大事に至ることはなかつたが、地域に多くのクラスターが発生していた時期、

断らないで救急患者さまを受けるには、常にこうしたリスクがつきまとつた。「どんなにリスクはあつても、とにかく命に関わる患者さまは診るという姿勢を貫きました。職員の皆さんには大きな負担をかけましたが、みんなが勇気を持つて取り組んでくれたと思います」と西尾医師は話す。

職員を守り、医療を守るために 全力を尽くした裏方の存在。

Special

最前線の職員のために 衛生材料を 不足させない。

新型コロナウイルスの感染拡大が始まった令和2年、全国的に医療用マスクやガウン不足が深刻化した。馬場記念病院はどうだつただろうか。施設用度課長代理の高橋伸行に話を聞いた。「最も厳しかつたのが、令和2年の3月～5月。備蓄が少なくなり、新たに購入するにして

ていました。このままでは現場のスタッフが何の防護具もつけずに患者さまに対応しなくてはならなくなる。そこは何としても食い止めなくてはと思いました」。

在庫不足を補うために、高橋たちはいろいろな工夫をした。たとえば、馬場記念病院では、ベトナムの人脈を頼り、現地でアイソレーションカウン（使い捨ての感染予防ガウン）を作つてもらう態勢も確保しました。現場の職員も、百均ショッピングで雨具のカツ



医療用マスク、ガウンなどの確保に奔走した施設用度課課長代理の高橋。



ペガサスリハビリテーション病院でも紀ノ岡看護部長と看護師長が毎朝集まり新型コロナウイルス対策について話し合っている。



医療用マスクやガウンの在庫を切らさぬよう、
在庫整理をする施設用度課スタッフ。



地域の方から
マスクの寄付も。
医療現場での衛生材料や防護関連用具の不足はマスクのみで大きく取り上げられ、国民全体の知るところになった。そこで、地域の方が心配して、マスクを届けてくださることもあった。たとえば、ペガサスの在宅医療・介護のご利用者が、訪問看護師を通じて「これ使つてください」と、マスクを寄付してくれることも…。マスクという物品そのものはもちろん、何よりも地域の方々の応援の気持ちが「非常にありがたかった」と高橋は振り返る。

幸い、ペガサスグループでは厳しく構えだ。職員の安全を守るために、職員サポートセンターも精力的に活動した。職員サポートセンターは、人事課、庶務課、総務課、厚生課などが一つになった組織である。



8月以降は物資不足を心配するような局面はなかつた。多くの事業所を抱えるペガサス全体の物品管理を担つた高橋は今、何とか2年間、職員を困らせることがなく、乗り越えることができる、「とても安堵しています」と笑みをこぼす。

職員のワクチン接種をしつかりサポート。



職員の協力、地域の皆さんからの寄付など、多くの方々の支援もあり、衛生材料を切らすことなく供給し続けられた。

くに印象に残る取り組みとして、職員のワクチン接種を挙げる。「感染リスクから職員を守るために、早くから希望を募り、準備を進めました。令和3年4月から開始し、希望する職員全員にワクチンを2回接種できました」。さらに、そこで得た運営ノウハウをベースに、馬場記念病院は堺市西区の集団接種会場として、市民のワクチン接種を全面的に支援してきた。

「苦労したのは、貴重なワクチンを無駄にしないこと。キャンセルが出た場合、できる限り別の人々に接種できるようにきめ細かく対応しました」と話す。

「職員のコミュニケーションを

深めるために、オンライン会議システムを使って食事会を開催したり、各部署で大縄跳びに挑戦した動画を撮影してもらつて公開する(ペガサスチャレンジ)

職員間の
コミュニケーション不足を
デジタルで補う。

コロナ禍の2年間、職員サ



オンライン会議システムを業務推進に利用するとともに、職員のコミュニケーション強化(食事会)にも活用。

コロナ禍に問われた 医療と介護の連携。

ペガサスは馬場記念病院を核に、地域社会で必要とされる在宅医療・介護の分野に幅広く事業展開している。コロナ禍の2年間、ペガサスグループ全体はどのように取り組んできたのだろうか。

通常のサービスを 続けることを モットーに。

令和2年から始まった新型コロナウイルス感染症の広がりは、医療の現場だけでなく、介護の現場にも大きな打撃を与えた。デイケア（通所リハビリテーション）、デイサービスセンター、訪問介護サービスなどの現場はご利用者と介護者が三密になりやすく、サービスの縮小、利用控えなどが多く報告された。ペガサスグループは、そうしたなかでも感染防止対

策を徹底しつつ、通常のサービスの継続に尽力した。

ペガサスケアアプロンセンター統括管理者の河内良祐に話を聞いた。「利用者さまの健康と生活を守るには、リハビリテーションや訪問看護などのサービスを止めないことが第一だと考えました。そのためどうすればいいか、みんなで知恵を出し合いましたね」。その努力が実り、ペガサスの事業所はこの2年間、サービスを止めることなく継続してきたが、感染への配慮から自粛する利用者さまがいたことも事実だ。「デイケアやデイサービスの利用を控える方

は、どうしても身体機能の低下が進みました。なかには、足の筋力が衰え、家の敷居につまずいて転んで骨折される方もいましたね。そういう方のために、自宅でできるリハビリテーションのメニューを紹介したり、訪問リハビリテーションの利用を提案しましたが、現在も自粛を続けています。一旦おうちに引きこもってしまった方を、どうやって外へ連れ出すかは大きな課題です」と、河内は表情を曇らせる。



利用するこども達の感染予防のため、遊具の消毒をするペガサスこどもデイセンターのスタッフ。

馬場記念病院を 核とする法人だからこそ 実現した感染防止対策。

ペガサスでは、訪問看護、訪問リハビリテーション、ケアマネジャーの訪問モニタリングなども、感染防御の対策をしっかりと実施した上で、継続した。「厚生労働省からは、人との接触を極力避けるために、ケアマネジャーは電話でのモニタリングも認められました」（河内）。

れました。でも、在宅の現場では、実際に訪問しないとわからなことがあります。だから、スタッフは心労もあつたと思いますが、以前と同じように訪問モニタリングを続けてもらいました」（河内）。

在宅医療・介護の分野で、通常のサービスを継続できた大きな理由は、「馬場記念病院を核とする法人の医療ノウハウの支援が大きかった」からだといふ。馬場記念病院ではICTが中

心となり、ペガサスの各事業所に対し、早くから感染防止対策について指導。たとえば、利用者さま宅を訪問する際のマスク着用、消毒といった基本的な対策はもちろん、発熱、症状などのあ

る利用者さまや職員に対して、速やかに抗原定量検査を行う体制も構築した。「利用者さまや職員が感染の疑いのある場合など、法人ですぐ検査してもらえたのは非常にありがたかったです」

ですね。その迅速な対応は、なかなか医療体制がバックボーンにならない、難しいと思います」。逆に言えば、地域で暮らす人々の健康を守るために、医療と介護の連携がもつと必要なのではないか。とくに、今回のような感染拡大においては、医療職と介護職が一緒にになって、地域の生活を守っていくなくてはならない。「介護だけを開いている事業所さんはペガサスのような手厚いバックアップを得られにくく、感染対策についても脆弱になる可能性があります。そうした事業所さんともしっかりと顔の見える連携を深め、何かあったときに地域の介護事業が情報共有や協力できるような体制づくりが必要だと思います」。

もつと顔の見える連携を深め、何かあったときに地域の介護事業が情報共有や協力できるような関係を作りたいですね」。河内は、地域のこれからを見つめてそう締めくくった。



こども達の触れる部分を丁寧に消毒する
ペガサスこどもデイセンターのスタッフ。

「コロナ禍で介護サービス利用を自粛している利用者さまの支援が、今後の課題です」と語る河内。



これまでの原稿は令和3年12月までの取材をもとに編集しました。

地域の医療・介護に関わる方たちと連携を深め、コロナ禍でも通常の医療・介護を届けられる体制づくりを進めていきたい。

感染症の脅威に対し、点ではなく面で支えていく重要性。

この2年間を振り返り、社会医療法人ペガサス理事長の馬場武彦はどのような課題を感じているだろうか。「課題はいろいろあると思いますが、地域全体としては、介護事業所の感染対策の脆弱さが露呈したように感じています。というのも、介護事業所の多くは医療機関と違つて、感染対策の知識や技術が集積されていません。そのため職員や利用者さまに感染者が一人でもると、打つ手がなくなり、事業所全体の休業を余儀なくさ

れてしまう。そうなると、高齢者の生活を支えることができなくなり、地域にとって大きな痛手となります。感染被害が少々出ても、それを最小限に抑えながらサービスを継続できるようフォローするような体制づくりが必要だと思います」(馬場)。

新型コロナウイルス感染症受け入れ医療機関の役割分担について。

地域の医療体制に焦点をあてると、この2年間、各医療機関はそれぞれが持てる力を存分に發揮し、患者さまの命を救うために全力を注いできた。そもそも感染症に関しては感染症指定医療機関が入院治療を担当するのが基本だが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、集中治療の必要な重症な患者さまは大学病院や地域の基幹



社会医療法人ペガサス理事長 兼 社会福祉法人風の馬理事長

馬場 武彦

コロナ禍の地域医療を語る。

地域の医療・介護に関わる方たちと連携を深め、コロナ禍でも通常の医療・介護を届けられる体制づくりを進めていきたい。



Peガサスグループの看護師から正しい防護服やマスクの着用の指導を受けるPeガサスケアプランセンターのスタッフ(上)。Peガサスクリニックでワクチン接種の準備をする看護師(下)。



足が厳しく指摘された。
しかし、実際の現場は必ずしもそうではなかつた。右記のグラフに示されているように、民間病院は軽症から中等症者の受け入れで大きな貢献を果たし、一部の病院は重症者の受け入れも力バーしてきたのが実情だ。「新型コロナウイルスに対し、大阪府ではまさにすべての医療機関の総力戦で闘つてきましたし、現在もそれが続いています。ただ、すべての病院が一斉に新型コロナウイル

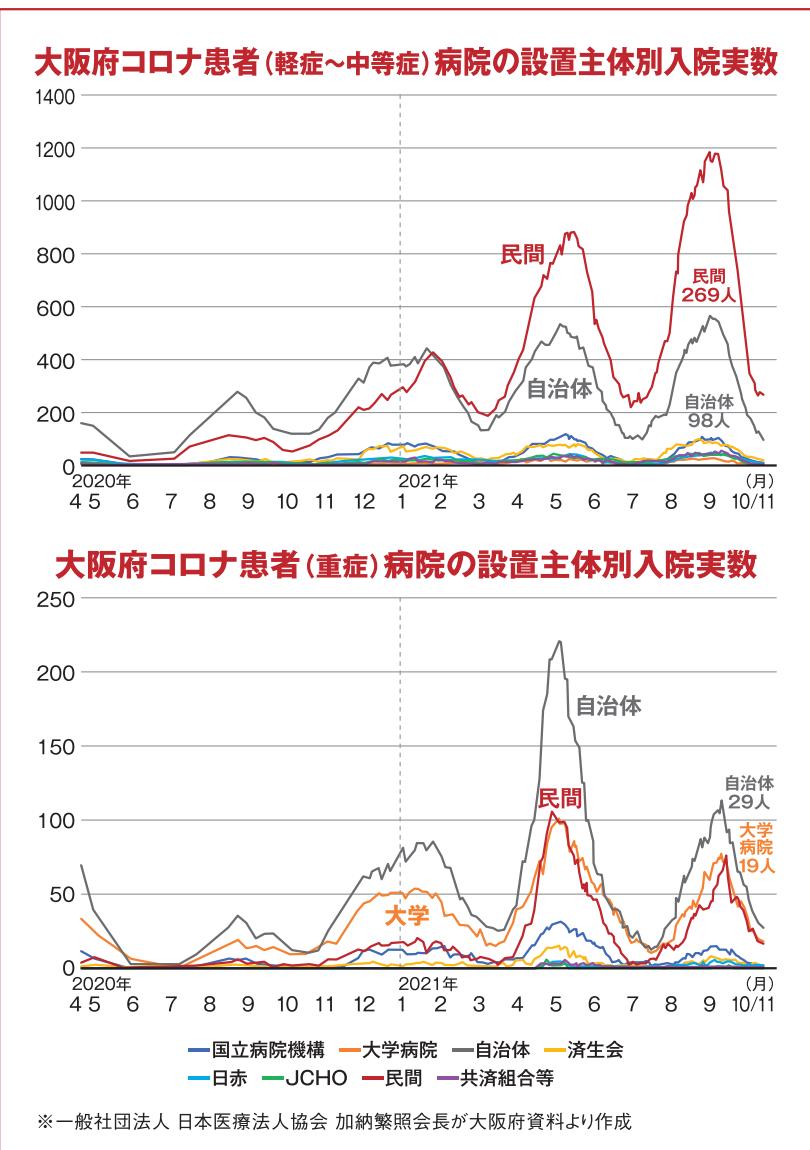
スに立ち向かうのが良かったのかどうか。医療機関にはそれぞれ果たすべき医療機能があり、得意・不得意の領域もあります。本当はもつと地域で役割を分担し、新型コロナウイルス対応に集中する病院と通常の医療に専念する病院をある程度分ける方が良かったのかもしれません。補助金のあり方も含め、そこはこれからみんなでしっかりと議論していくための議論が必要だ。今後の地域医療体制をより良くしていくための議論が必要だ。

「と思ひます」と、馬場は語る。

オミクロン株の流行で 救急医療の現場は

変わつてきましたが、それでも
私たちは救急医療を止めるわけにはいきません。なんとか現
場の人員を確保し、緊急手術や
入院治療を必要とする患者さまを救うことに全力を尽くして
いきたいと思います」(馬場)。

さんの献身性に頼るだけでは強い組織を作ることはできないと考えています。一人ひとりが無理なく力を發揮できるような仕組みやチームづくりが求められていますし、そうした視点からもペガサスグループをさらに成長させていきたいと考えています」。馬場は強い決意を持つてそう締めくくつた。



※一般社団法人 日本医療法人協会 加納繁照会長が大阪府資料より作成

に厳しく自らの行動を律して
くれていますが、それでも感染
してしまう人が出て、現場は人
員不足に陥るリスクをはらんで
います。同じように、救急搬送
されてくる患者さまが実は感
染していたというケースも急増
しています。以前は感染した患
者さまとそうでない患者さま
をしつかり分けて治療できてい
たのが非常に難しくなりまし
た」と馬場は頭を抱える。

オミクロン株は感染力は強い
が、重症化リスクは少ない。その
ため、新型コロナウィルスの治療
そのものは以前ほど難しくな
くなつたが、その一方で、一般の病
気の治療をいかに継続していく
かが大きな課題になってきたの
だ。「第5波までは明らかに
通して、どんな教訓を得ること
ができたか聞いた。「教訓とは
ちょっと違うかもしれません
が、医療や介護、福祉に携わる
人々の献身的な努力や働きを、
改めて誇りに感じました。それ
はペガサスグループの職員も同
様で、みんなが自分を犠牲にし
てでも患者さまや地域のため
に尽くそう、という強い使命感
と勇気を持つて臨んでくれまし
た。職員、そしてその家族の皆
さんには、本当に心から感謝し
ています。また、地域の皆さん
からもいろんな面で、有形無形
の温かい応援をいただいたこと
を、本当にありがたく思つてい
ます」と馬場は話し、さらに続
けた。「ただ、ペガサスグループを

つばさ 62

2022年春号
令和4年3月発行第16巻第4号
(通巻62号)

地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人 馬場武彦
編集長 平岩敏志
編集 ペガサス広報委員会
発行 HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

今号の第2特集は休載です。毎回、馬場記念病院と連携し地域医療を支えてくださっている診療所をご紹介しておりますが、診療所の先生方が新型コロナウイルス感染症のワクチン接種などで多用のため、また感染予防のために取材撮影を控えることとなり、掲載を見送らせていただくこととなりました。

つなば62

地域医療を考えるペガサス情報誌

未知のウイルスの脅威に立ち向かうなかで、
医療機関として大切なことがあります。
いつのときも上質な医療を追求する姿勢。
医療提供ノウハウを蓄積する力。
そのためのバックボーンの確かさ。
介護・福祉をも見つめた真の地域医療の形。
そして、医療従事者としての職員の使命感。
これらがあってこそ、
どんなときも、いつも変わらぬ医療を提供できると、
ペガサスは再認識しました。

こうした数々の課題に、
ペガサスでは、すでに答えを得ているもの、
まだ道半ばのもの、
さらなる全力投球が必要なものがあります。
新型コロナウイルスとの闘いがまだ続くな、「すべてを支えているのは、人と、町とのきずなです」。『ペガサスの約束』に刻んだこの言葉を胸に、
私たちは、地域の皆さんとともに歩み続けていきます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦

